

市川昌広; 祖田亮次; 内藤大輔 (編). 『ボルネオの〈里〉の環境学——変貌する熱帯林と先住民の知』昭和堂, 2013, 240p.

英国植民地時代から農園開発などが進展したマレーシア領(サバ州・サラワク州)のみならず、オランダ植民地であったインドネシア領(カリマンタン諸州)も、今やいたるところで大規模農園開発が進んでいる。企業か地元住民かにかかわらず、皆が儲かることに手を出す。その結果、熱帯林は消失し、アブラヤシやゴムの農園がどんどん広がっている。それが人々の自主的な選択であればまだしも、そうでないケースも頻発している。

かつて評者が3年間滞在した1980年代後半、東カリマンタン奥地の高原地帯に住む人々は、森へ行行って籐を採取し籠を編み、シカやイノシシを狩り、森の中を歩き回って樹液を含む木片(沈香)を採取していた。そして、それらの産物を近隣の町で塩や食料品などの生活必需品と交換して生計をたてていた。また、大河川の上流域の人々は企業による木材伐採現場での賃労働、川での砂金採集、森での沈香や籐の採取により現金収入を得ていた。中流域の人々は個人で所有し管理する籐園(見かけは森と類似)が重要な生計手段であった。

ここ50年くらいの時間枠で振り返って見ると、人々の生計手段は徐々に変化してきた。焼畑サイクルは次第に短くなり、大豆・カカオ・コーヒー・ゴムなど世界市場の動向に応じて儲かりそうな商品作物を導入する。また、沈香・籐・燕の巣など、その時々で市場価格の良い非木材森林産物を選んで採取し、現金の必要に応じて木材伐採労働など出稼ぎにも行く。これは、いわば自然生態系や経済状況の変化に対する恒常的な順応といえる。

この順応を可能としたのが森林生態系と焼畑農業である。焼畑農業により人々は重要な主食である米を確保できた。乾期が長引いて米が不作になっても、森の中でイモ類や果実などを採って凌ぐことができた。森や焼畑農業が安全網の役割を果たしたのである。だからこそ、人々は安心感を持ってその時々で儲かる生計手段を選択してきた。これが焼畑民族の行動原理ではないかというのが

評者の暫定的な理解である[井上2014]。

ところが、2000年代後半から、企業による大規模なアブラヤシ農園の開発が急速に進みつつある[河合・井上2010]。アブラヤシ農園が開発されると、その土地でこれまでのように焼畑・ゴム園・籐園・カカオ園・果樹園など多様な土地利用を組み合わせての生計維持[寺内他2010]は、かなり長期間にわたってできなくなる。いわば、不可逆的な生活スタイルの転換が待っている。そればかりか、一つの村の中で賛成する人と反対する人が反目しあい、村人どうしの人間関係が崩れてしまうケースも見られる。何よりも、ボルネオ先住民の生計にとっての安全網であった森林が消失することの意味は計り知れない。さらには、企業とは関係なく自主的な選択でゴム農園を造成し、焼畑農業を止めてしまった人もいる。

こうして、生計維持のための安全網が外部の力でダメージを受けたとき、あるいは自らそれを捨て去ったとき、焼畑民族としての行動原理は劇的に変化するだろう。そして、それは先住民としての帰属意識にどんな影響を及ぼすのであろうか。このような問題意識は、評者が試みてきた研究、すなわち地域研究と政策研究を同時並行的に進め、かつ両者を繋ぐ研究を遂行するうえで必須である。

前置きが長くなったが、以上述べた問題意識に対するヒントが見つかるのではないかと期待して、本書の書評を引き受けた。カリマンタンより一歩先に農園開発等が進んでいるマレーシア側の研究が評者の問題意識に対して何を語ってくれるのだろうか……。

本書は、ボルネオ島の人々が暮らす「里」を舞台とし、人々が有する「知」を切り口として環境の変化にどのような影響を受け、どう対応しているのかを描いたものである。各章では、フィールドワークによって集められたデータが示されており、これが本書の価値を高めている。紙幅の制約上、ここではデータを執筆者たちがどのように読み取り解釈しているのかに焦点を絞って紹介し、批評したい。

第1章(小泉 都)は、森林内のすべての植物を知っていると豪語する西ブナンが実際にさわめて豊かな植物知識を持っていることを量的データ

で示し、他の集団との比較検討をおこなっている。知識の枠組は集団により異なり、それに沿って個人の学習が方向付けられるとともに集団に蓄積される知識が方向付けられ、その結果として互いに異なる豊かな植物知識を発達させてきたという考察は説得力がある。しかし、近年の生活の変化と知識に関する考察において、知識の運用を支える社会的な仕組みがなければ知識を生かせないという指摘自体は魅力的だが、データと論理展開が十分でない点は改善の余地があると思う。

第2章(祖田亮次・目代邦康)は、河川災害の原因について、自分自身の観察および専門家やメディアからの情報を組み合わせて語られるイバンの人々の説明と、地形学や水文学による科学的な説明を対比させる。そして、先住民と科学者が対象とする時間と空間のスケールに大きな差があるからこそこの両者にズレが生じること、および人々は「腑に落ちる」説明を必要としており、神話創造のプロセスと類似するとの指摘は魅力的である。この章はここまでで十分な価値をもつ。地形学や水文学が何を提供できるのかという最後の部分で提示した問いは蛇足のように思う。

第3章(市川昌広)は、里での様々な林齢の二次林を主とするモザイク景観の形成過程を解説し、その生物多様性は原生林と比べて低いが、「暮らしの生物多様性」(先住民の暮らしからみた生物多様性)は必ずしも低いわけではないことを示している。そして、景観に変化をもたらす要因としてアブラヤシ栽培と人口流出を挙げて検討している。ロングハウス全戸数の大半が空き室となっている現状には驚かされた。評者のフィールドである東カリマンタンのアボカヤン地域では、1988年までの約20年間で人口が約4割に減ってしまったが、これはロングハウスごと下流へ移住したためであった。日本の農村研究の言葉で言うところの「挙家離村」型の人口減である。これに対して、サラワクの場合は年に数回は村に戻ってくるようなので、「出稼ぎ」型の人口減のようだ。また、筆者は先住民の有する「身の丈の技術」を重視するが、「身の丈」自体が変化し巨大化すれば自動的に住民自身による大規模アブラヤシ農園を生み出すという重要な論点を提起している。ただ、最後のところで

里の知の消失に対応する道として人々の価値観の転換を提唱しているのは安易だと思う。もっと具体的な政策的含意として経済や社会のしかけの方向性を示して欲しかった。

第4章(加藤裕美・鯨島弘光)は、木材伐採により哺乳類の多様性が打撃を受けるなか、アブラヤシやアカシアのプランテーションを利用している哺乳類がいて、種によっては生息数を増やしていることを示している。そして、定住した狩猟採集民シハンが、プランテーション化による動物生態の変化について新たな知識を蓄積・融合・再生産させつつ、周辺環境に順応していることを詳説している。伝統的生態学的知識が急激な近代化に対して可変的であり可塑的であることを実証した点にこの章の価値がある。この事実からどんな政策的含意を得るのかについて筆者なりの展開が欲しかったところだ。

第5章(内藤大輔)は、森林認証制度の導入によって持続可能な森林経営の体制が強化される過程、すなわちサバ州政府が推進する科学的林業の進展にともなう伐採施業区の境界が厳格に守られるようになるとともに、先住民オラン・スガイによる従来の環境に負荷の少ない森林利用が衰退してゆく様を描いている。村周辺の川沿いで住民グループが非公式に実施するムミンギールという伐採作業は、カリマンタンでのバンジルカップを彷彿とさせるものである。「科学的林業」による「持続性」の保障により資源管理に正統性を付与し林業局の権限拡大をもたらしたという考察は妥当である。しかし、先住民がその地で暮らし続けていくために必要な森林利用を保障することではじめて「持続的」といえるのではないかと章末で問いかけているが、今やこの問いへの答えを示唆すべき時がきているはずである。

第6章(森下明子)は、サラワクの州主席大臣や伐採・プランテーション企業の相互関係を中心に、1980年代以降には木材資源をめぐる強固な利権構造が構築され、1990年代半ばから早生樹の植林事業、1990年代後半からはアブラヤシ・プランテーションをめぐる利権が政権基盤を維持するために利用されたことを詳述していて興味深い。この過程で先住民による里の利用が制限されていた

ことは確かであるが、国内外の NGO の支援を受けて GPS などの新たな技術や知識を活用して対抗する術も身につけてきている。一方で、サラワク生物多様性センターによるバイオテクノロジー分野の投資推進など伝統知の政府による利用も進められている。このような「知をめぐるせめぎあい」のなかで筆者は、州政府と企業が、先住民と協働して持続可能な森林の利用と保全に取り組み、新しい知の枠組が生成されることに期待する。しかし、現在の利権構造からこのような期待できる状況へと移行させる手段として示唆されているのは先住民による投票であると述べるにとどまっている。先住民の投票行動への筆者自身の深い理解の内容をもっと詳細に解説・展開して欲しかった。

冒頭で述べた評者の問題意識に関連し、本書を読んで確信したことがある。それは、人々の生計にとって安全網として機能していた森林生態系と焼畑農業が大規模農園に取って代わられた後であっても、人々はそれなりに自然や社会の環境に順応して生きてゆくということだ。ただし、そのような変化が良いことなのかどうか判断することはできない。にもかかわらず、研究者はそのような変化の様を記述し、何らかの政策的含意を導くことができてしまう。そもそも、そのような変化を外部からの影響による変容として受動的に描くのか、生存・生計のための戦略として能動的に描くのか……、研究者の価値観や立場性により描かれる物語は趣を異にし、それに依拠する政策的含意も変わってくる。「里」や「知」の変貌を検討する際に、このようなメタな視点から具体的なフィールドワークの成果を照射してみる作業も必要だと思う。

ボルネオのみならず熱帯地域の先住民による自然利用と知について興味を持つ多くの人に読んでもらいたい本である。

(井上 真・東京大学大学院農学生命科学研究科)

引用文献

井上 真. 2014. 「ボルネオ先住民の行動原理 (コラム 6)」『教養としての森林学』日本森林学会 (監修), 井出雄二; 大河内 勇; 井上 真

(編), 135-136 ページ所収. 東京: 文永堂出版.
河合真之; 井上 真. 2010. 「大規模アブラヤシ農園に代わる『緩やかな産業化』の可能性——東カリマンタン州マハカム川中上流域を事例として」『林業経済』63(7): 1-17.

寺内大左; 説田 巧; 井上 真. 2010. 「ラタン, ゴム, アブラヤシに対する焼畑民の選好——インドネシア・東カリマンタン州ベシ村を事例として」『日本森林学会誌』92(5): 247-254.

本名 純. 『民主化のパラドックス——インドネシアにみるアジア政治の深層』岩波書店, 2013, 215p.

豊富なデータに裏打ちされた現代インドネシア政治の鳥瞰図を得ることができるだけでなく、政治エリート間の闘争の物語としても読み応えがある。しかも、民主制の後発地域アジアにおける、民主主義の制度と実践のあり方についても思索をうながす好著である。

スハルト体制崩壊後、とりわけユドヨノ政権以降のインドネシアは、民主化の成功例、民主制の定着事例として語られてきた。すなわち、若い労働人口と豊かな天然資源に支えられた堅調な経済成長を背景に、新旧両体制のアクターが民主的なゲームのルールに則って政治をしており、結社や言論の自由の分野で多少の揺り戻しはあるものの、他の東南アジア諸国に比べれば自由で民主的である、というものである。しかし、日本の新聞でもおなじみのこのような評価は、大臣や国会議員、さらには憲法裁判所長官をも含む汚職事件や、地方部における暴力をとまなう紛争といった現象と、どうもなじまない。また、スハルト体制期に大きな政治・治安機能を有し、また経済的利権も享受してきた軍部が、なぜ民主的ゲームのルールに従い続けているのかという疑問も、当然に投げかけられてしかるべきである。

こうした違和感は、本書の次のような主張によって解消される。民主化後の政治家、国軍、警察といった主要アクターは、利権の分配や政治権力の分有の恩恵に浴しており、既存の民主的なゲームのルールを否定する動機を持たない。この